# 第22回
# ハンセン病問題に関するシンポジウム
## ～人権フォーラム2023～
## 「高校生によるハンセン病回復者とご家族への聞き書き」作品集

主催：厚生労働省、法務省、文部科学省、全国人権擁護委員連合会
共催：全国ハンセン病療養所入所者協議会、
ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会、
ハンセン病違憲国賠訴訟全国弁護団連絡会
後援：日本皮膚科学会、日本ハンセン病学会、ハンセン病市民学会

# 目次


## 人間にはやっぱり笑顔がないと
### ～ハンセン病回復者山口文夫さんの半生～ …… 5

語り手　山口文夫　星塚敬愛園入所者自治会会長

聞き手　愛媛県立宇和高等学校三瓶分校　2年
大星舞華　松井菜々恵　宮中七海　矢田倖大

## 苦労ばかりと思わないで！ …… 12

語り手　城正　多磨全生園入所者

聞き手　宮崎県立延岡高等学校　1年
伊藤愛珠

## 思いよ届け …… 17

語り手　黄光男　ハンセン病家族訴訟原告団副団長

聞き手　恵泉女学園高等学校
3年　佐藤幸　1年　相原ことは　五十嵐愛　橘有咲　中村公美


本紙に記載している学年は2022年度当時のものです。

# 人間にはやっぱり笑顔がないと
## ～ハンセン病回復者山口文夫さんの半生～


語り手 山口 文夫
星塚敬愛園入所者自治会会長

聞き手 愛媛県立宇和高等学校三瓶分校2年
大星 舞華　松井 菜々恵
宮中 七海　矢田 倖大


### ■自己紹介

私の名前は、山口文夫です。1949年の1月8日生まれの73歳です。出身地は長崎市茂木です。4人兄弟の2番目になります。1回も結婚をしないまま73歳になりました。

### ■星塚敬愛園への入所

私はハンセン病になったことを、昭和35年、小学校6年生の夏休みのときに知りました。私は、昭和34年、小学5年生の時に長崎市茂木というところから、長崎市内に移住してきました。そのときに、牛を飼っていて、毎日海に遊ばせに連れて行ってました。その牛が、何かの拍子に驚き飛び跳ねたため、私が引きずられる状態になり、足の両膝から下が傷ついてしまいました。怪我をして以後、あらゆる病院に通いました。市民病院の時には、医者が看護師等の前で、体を刷毛でなでたり、針で刺したりしました。医者が「ここはこうだよ。ここはそうじゃないよ」と説明していたのを、見たり聞いたりしました。私は、裸で針を刺されたり見られたりしたことを辛く思いました。そして、私は「らい病」だろうということで、回されたのが大学病院でした。大学病院でも同じように、多くの人の前で裸にさせられ、針で刺されたり、刷毛でなでられたりしました。「ハンセン病」という病気であることはわかってたのではないかと思います。大学病院では私のお袋も同席し、説明を受けました。それから親は「どっかに旅行に行こうかねー」と言いながら、畑仕事をした後、夜は私の寝間着を縫ってくれました。小学6年生の夏休みに旅行に行こ

うということで、県の関係者だったのではないかと思いますが、知らないおじさんに連れられて強制隔離をされました。鹿児島県の星塚敬愛園というところです。

小学6年生で親から引き離された時は、詳しくはわかっていませんでしたが、何で自分だけがと思っていました。両膝の皮が剥げていたため、その治療が原因かなと思いました。入園して、小中学生と同居する中で、手が曲がったり、皮膚に感覚がなくなったりするのは、友人、知人から教えられました。他の（ハンセン病以外の病気の）人は通院しながら治すのに、何で引き離されたのだろうかと、みんなと話していました。

## ■どんな状況も受け入れてくれた家族

私は家族から偏見差別などは感じたことはありません。昭和35年に入園してから、お袋と別れましたが、昭和36～37年には長崎の家のほうに1人で帰っていました。その後も中学校、高校を卒業する頃の夏休みや冬休みには1人で帰っていたので、家庭では偏見差別を感じたことはありませんでしたね。

しかし、世間の目といいますか。時々槍が刺すように、視線、目線を感じたりすることはありました。療養所に入って、眉毛が落ちて、鼻毛がぜんぶなくなり、小指が若干曲がっていたので、「あの人は異様な感じだな」と。ハンセン病患者は嫌われる。ハンセン病を知らなかったら、やっぱり見た目だけで偏見、差別が行われることが嫌われる原因じゃないかと私は思いながら、心だけはいつも門戸を開いております。

## ■療養所での食事の変化

（昭和35年入園当時）鹿屋市の星塚敬愛園では、今みたいに栄養管理師とか調理師の職員がしている調理ではありませんでした。療養所に来ている人の中で調理師さんがおったり、寿司屋さんがおったり、いろんな経験を積んできた人たちがたくさんおりました。そういう人たちが、給食で好きなレパートリーをずっと作っていって、それを入園者に提供しておりました。そういう面では本当においしい手料理を作ってくれましたね。牛も豚も飼っとったし、鶏も飼ってた。牛がいたころは、牛乳をよく入院している人達に何十リッターも入るようなやかんで、いっぱいくんで、それを入院者のところに持ってきて飲ませてくれたりしていました。だから、それぞれの専門家はおったんですね。そういう人達がたくさんおったから、給食が成り立っていたし、療養所の中の畑を有効に利用して給食の方に持って行って、それを調理していました。だから今でも味にうるさい人はおりますよ。それから徐々に変化して、現在みたいに、栄養士、栄養管理師、調理師が調理するようになりました。

入った当時は、朝食は、アルミニウムの食器に麦飯のご飯と味噌汁がでていましたね。ごちそうといえば、牛乳を毎日コップに少しずつ飲ましてくれていました。夕食には、最初は魚や肉が出て、昔のことですからクジラの肉なんかもよく出てきました。あとは鹿児島県特有の芋や芋の茎、葉っぱが出ていました。皮を剥いて、つわみたいにして、煮しめて食べていました。

私が再度入所をした時の昭和53年ぐらいですね。その頃は、非常に手の込んだカレーライスやラーメンがあった。ラーメンを我々も餅つきの時に食べたり、日常の献立の中に食べさせてもらいました。年に1度、餅つきを本物の杵と臼でついていました。その時には、私たちハンセン病患者は末梢神経の麻痺で、手で餅を丸めることができませんでした。そこで当園に看護学校というのがありまして、その看護学校の生徒さんたちが私たちや職員に代わって餅を丸めていました。そのお礼と言いますか、腹が減っただろうということで、職員たちが一生懸命ラーメンを作

って食べさせてくれました。未だに思い出し、昔のカレーライスやラーメンはおいしかったと口癖のように出てきます。ＯＢの人たちとも敬愛園の食事はやっぱりカレーライスやラーメンは忘れられんなあと話しています。

## ■岡山県立邑久（おく）高等学校新良田（にいらだ）教室への入学

昭和39年に岡山の邑久高等学校新良田教室に入校し、その後、４年間は岡山県で過ごしました。新良田教室は、定時制普通科の４年制で、１期生から30名ずつが１クラスということになっていました。大体30名の４クラスなんですが、教室ができた昭和30年代は競い合って受験勉強し、入学ができたようです。しかし、徐々に５・６期生からは、30名という定員をだいぶ切っています。私が入った10期生の時には、18名くらいまで定員の枠が外れていました。

高校時代は写真クラブというのがありまして、私は二代目の写真クラブの部長になりました。自分で現像液、停止液、定着液を作って、それからプリントしていました。いろいろなイベントの撮影を私が一手に担って撮影し、それをまた、販売もしていました。その頃は、（１枚あたり）５円か７円ぐらいで売ってたと思うんですよね。将来は、高校を出て、社会復帰をし、新聞記者かレントゲン技師になりたいと思っていました。そのために、カメラやレントゲン関係の勉強をずっとやっていましたが、実際にはかないませんでした。ですが、社会復帰をして、土木建築の仕事で現場写真をつくるのには、大きな役に立ったと思っています。

## ■外出時の理不尽な扱い

（外出の場合は）園長名だったり、高校だったら主治医の先生だったりと、そういう先生から許可証をもらって、岡山の町まで出て、写真用品を買いに行っていました。ただ、行ったり、帰ったりするとき、「自分はやっぱり病気だからなあ」と思いながら、船に乗って、職員と同等の座椅子に座るということもできなかったですね。それで「我々自身がもっとなんとかせないかんなあ」ということで、運動をしましたね。島には、共産党の下部組織である民青同盟というのがあって、高校生はそれに全員加入しているんですが、高校時代にその会で「職員船に何で我々が乗ったらいけないんだ」と申し入れたことがありました。それで職員船には乗っても構わないからという通達が来ましたね。そういう面では、同等になったんかなあと思いましたね。

高校時代はちょっと他の人よりも羽目を外して、岡山の高校から大阪に出て、奈良に行く途中の曽根崎署で捕まったということがありました。それは、たまたま、おのぼりさんで、都会に来て初めて見るビル群だったので、ずっと見て回っとった時でした。その時に警察に捕まって、「ちょっと署まで来い」と言われて、３人それぞれ別の部屋に入れられて、事情聴取を１～２時間されましたね。その時に、らいの施設から外出許可証に園長名と主治医名を持っていたので、何も怖くなかったんです。警察と岡山の施設長か誰かが、無菌であるということを証明しながらしゃべってくれてたと思うんですよ。それがあったから、すぐに一応解放されました。でも、法律的には、本当は強制隔離（の時代）だから、実際には外には出てはいけないということなんだけれども、出られるという状況が、世の中にはいっぱいあったわけですね。その時代は、見て見ぬふりをするという情勢があったわけです。それもやっぱり理不尽だなあと思いましたね。

## ■高校卒業後の進路

邑久高等学校新良田教室を４年で卒業し、こちら（星塚敬愛園）に帰

ってきて、約1年少々は鹿屋市の方で仕事をしていました。そういう時に土木建築をしていた私の父親から「運転手が事故を起こして運転する人がいないから長崎に帰ってこんか」ということで帰りました。それから12～3年、長崎で仕事をしながら建設土木の仕事をしていました。その後、暴飲暴食が重なり、病気が少しずつ悪化し、後半には1年に2～3回敬愛園の病院を受診しながら薬を持って帰り、長崎で仕事をしていました。

## ■星塚敬愛園への再入園と自治会役員への立候補

両足が腫れだしたので、今度だけはいけないぞということで星塚敬愛園に帰ってきた。そしたら、病気とともに内臓のほうも弱っているということで、治療をしました。それから色んな薬を使った弊害で、一時期意識が飛んだような状態で、3ヶ月くらい寝たきりが続いちゃったんですね。もう社会復帰は無理だなということで、それからずっとやることがない状態で昭和56年までは何もしないで遊んでいました。しかし、「この状態ではいけないな。何かしなくちゃいけない」ということで、自治会役員の選挙が昭和56年にあり、選挙に出ましたら、若手が出たということで話題になり、当選をしました。それから先は、よく自治会の仕事をしました。

平成18年に自治会の代表をしたところで、令和3・4年までは辞めていました。15年近くは自治会の役職はしなかったわけですが、自治会会長をしていた友達が「どうしても出てくれ」ということで、再び自治会の役職に就きました。その友達は心臓弁膜症で、結局手術をしたあと星塚敬愛園に帰ることなく、病院で亡くなりました。副会長をやっていた私は、その人の後を引き継がないといけないという状況になりまして、前任者の任期の間は続けるという約束で今、会長を続けています。

## ■星塚敬愛園での行事

私が来た昭和35～6年ごろは、鹿児島の玉龍高校や鹿児島実業、宮崎の高校とかそういう人たちが、星塚敬愛園の球場で野球の慰問試合をして、それを観戦させてくれていました。そういったものが、まず思い出になります。それから昭和36年過ぎまでは、23の県から来ているハンセン病の入園者が、県ごとの大運動会をしていました。例えば、鹿児島県と長崎県と宮崎県とで5、6組出て、1周400mコートを走って1位を争っていました。皆が30代、40代の若い頃でしたね。私たちも10代くらいで、それに混ざってその運動会に興じた事があります。再入園して最初に団体でやった行事が、23の県対抗の大運動会でしたね。県対抗のリレーをやったり玉入れをやったり、いろんなことを県単位の運動会でやりました。その時の応援団は賑やかなもんでした。

## ■自治会長としての取り組み

昭和53年に改めて入園したときには、病気がひどくいろんな後遺症が出るような状態でした。その時に、赤く腫れ上がるような症状が体全体に出たり、のどに出たりしたりして声が出なくなりました。私を見舞ってくれた人ものどを切開して、声が出ない状態で私を見舞ってくれました。こういう時に、自分の声を皆と一緒に歌いながら残そうと思ったのが、「カラオケ音楽同好会」を作ったきっかけです。皆が集まってコミュニケーションが取れる場所を作るため、当時流行っていたカラオケ音楽というのをいち早く導入しました。

地域とのコミュニケーションを含めて、カラオケ好きな人たちに会員として入っていただいた。このカラオケは我々にとってはボケ防止であったり、健康のためであったり、そしてその記録として残すということも大事な時間じゃなかったんかなと、私自身はそう思っています。

カラオケのみんなと旅行に行ったり、お互いの交流も、ここ（星塚敬愛園）で全国大会を3回ほどやりました。全国にこういう会を持てて、全国の友人、知人がたくさんできました。そして、自治会の仕事では大方、全療養所は回っております。そういうような中で、カラオケ同好会として縁をつないでくれている人がいます。私たちがこうして鹿屋市の人たちと仲良くなったのも、多くの方が舞台に立っていただき、人との出会いができ、ご縁をもらったからでした。

（大会を）40回で閉会しようということにしておりますが、コロナの影響があり38回で止まったままです。徐々に入園者が減少し、「38回かどこかで、閉会しないとなあ」という風に考えたりもします。中々うまい具合に行きませんでしたね。

## ■コロナ禍での行事

コロナが蔓延しないように、今までの活動とは違うことを呼び掛けています。コロナにかかった場合、状況によっては園内で対応ができないかもしれない。そして、中等症であったとしても、死につながるという循環器系の症状をいくつも持っている方達がいます。多い時は１３００人ほど（入園者が）いましたが、今はたったの73名になり、出来るものが限られ、年齢とともに行動力も非常に乏しくなってきた。行動しなくても、誰かが連れて行ってくれれば見られるということで、今、花園を作っています。去年はチューリップを５００本ぐらい植えました。今年は、２５００本のチューリップを植え、残りのスペースには菜の花を植えましたので、春には見ごろになると思います。その時には、皆がまた、見に来て楽しんでくれるかなあという期待をしております。

そして、今、3年に渡り花火大会をしております。その花火大会は近くの15の町内会にもお知らせしています。当初は10分程度の花火でしたが、今回2回ほど冬の花火を実施しました。真冬でありながら、2～3万人は見てるんじゃないかということでした。少しでもコロナの蔓延を防止するようにしていただいているお医者さん、看護婦さん、介護員さん、そして福祉を司ってる市の職員の人たちなど多くの人に感謝や労いを込めて、花火を上げるというふうに致しております。

## ■差別に対しての思い

入園者の中においても健康の度合いによっては不自由な人を差別したがる、差別というかお付き合いをしないといった時代もありました。そんな中、目が不自由で、手首から先がなく、両足義足のおじいちゃんがいました。私はその人になぜいつも明るいのか聞きました。すると、「私には笑うことしかありません。笑ってさえおれば人は必ず集まってきます。しかし、笑いのないところには人は集まらないよ。どれだけ知恵があろうが何しようが笑わないと人は集まってこないよ」と。その時に人間にはやっぱり笑顔がないといけないなあというのを実感し、それが偏見、差別の原点ではなかろうかと、その人から教えられました。

ハンセン病の場合、国際らい学会という第1回国際会議があり、そのときにはもう隔離の必要はないと言われていたのに、日本の政策はやはり、らいの収容と強制隔離という政策が取られました。京都大学の小笠原登先生は隔離をする必要性はないとその時点でおっしゃっていました。しかし、国の方は国土浄化で国民を守るんだということで、人権を無視する政策が行われ、それが、強制隔離でした。その中から「無らい県運動」や色んな運動が起こって、結局、差別から差別を生むようなことを国として、あるいはそれぞれの県あるいは国民一人ひとりが行いました。そういう人生を狂わせるというようなことを国は政策的に、法律の中でしました。そのため、私はこのような人生を選ばざるを得ませんでした。

このように人生を国が選ぶ場合、選ばせる場合、間違った方向へ行く可能性があります。国の方が、高齢者に対して、偏見差別、あるいは人権をも無視したようなことが未だに行われています。

将来的には、ハンセン病も世の中の人から、ただの風邪なのか何なのかわからないぐらい、外見が少しおかしいなというぐらいで、ただ普通の人だと思われる状況になれば、ハンセン病で生きていても、もっと気軽な形で生活ができるのかなと思っております。そして、今後、我々もほかの人を思いやる、思いやりの気持ちが持てるようなそういうような時代になればいいと思いますね。

## ■教育の大切さ

若い人たちの偏見、差別は教育をしているからなくなっている。しかし、高齢者の方々にはあまり理解が広まっていない。そのため、私が講演なんかするときに、ハンセン病を怖がっているのか。人間としての山口を怖がっているのか。どっちなのか聞いてもなかなかおっしゃってくれません。偏見、差別という大きなものの考え方は、生まれながらにしてついているんですよ。それをどういう風に理解するかは、教育しかありません。ハンセン病に関して多くの方に勉強していただけたら、世の中には偏見、差別がなくなるんじゃないかな？　その教育を受けている人は偏見も差別も何もない。普通の人間として、対等に付き合いができると思うんですがね。ですから私たちは、社会との交流をより多くしていかないといけない。私たちみたいな自治会に立っている人が前面に出て、講演に出たり、自分の湾曲した手やら、色んな障害があるところを見せ合ったりしながら、「こんなことではいけないんだ」ということを伝えていくことが我々に課せられた義務ではないかなと思ったりします。また、ものの見方をやっぱり、そういう当たり前のものの見方をする教育。そういったものが大事じゃないかというふうに今も思い続けております。

［取材日：２０２２年11月16日／12月13日］

## 【聞き書きを終えての感想】

今回、聞き書きをして、改めてハンセン病について考えることができました。元々、学校の授業でハンセン病について学習していました。そのため、ハンセン病に対しての偏見や差別があり、患者の方々が苦しい思いをしていたということも知っていました。しかし、回復者の方と交流したのは今回が初めてで、今まで知らなかったことを知ることができ、貴重な体験になりました。

私は、山口さんがおっしゃった「美しいものは美しい。醜いものは醜い。人は生まれながら美醜に対する偏見や差別の気持ちを持っている。だからこそ、どういうふうに理解するかは教育しかない」という言葉が印象に残っています。山口さんが教育の大切さをおっしゃっていたように、これからも正しい知識を学んでいきたいと思いました。また、偏見や差別をなくしていくために、正しい知識を伝えていきたいです。（大星舞香）

今回、初めてこの聞き書きプログラムに参加してみて、多くのことを学ぶことができ、いい経験となりました。私が心に残っている山口さんの言葉は、「偏見、差別という大きなものの考え方は生まれながらにしてついている。しかしそれをどういうふうに理解するかは教育しかない。その教育を受けている人は、偏見も差別も何もない」というものです。私も小学校１年生の頃から、道徳などの授業を通してたくさんのことを学びました。そして、多くの様々な差別や偏見について学んでいく中で、私が思っている以上に社会にはたくさんの問題があると感じていました。そのため、山口さんもおっしゃっていたように、教育はとても大切だと改めて思いました。世界にあるすべての偏見や差別を知るのは難しいですが、少しずつでもたくさんの人に正しい知識を学んでもらい、すべての人が生活しやすくなることを願っています。そして、今回学んだことを私たち自身でも広める活動をし、今回参加させていただいたシンポジウム等にたくさんの方々が参加していただけると嬉しいです。参加させていただきありがとうございました。（松井菜々恵）

聞き書きプログラムに参加して、ハンセン病について詳しく知ることができました。また、いまだに偏見や差別があることを知り、ハンセン病の方が他の人と変わりなく過ごしやすくできるように、お話をうかがった自分たちがまず行動し、それが周りの人に伝わっていけばいいなと思いました。聞き書きプログラムではハンセン病のことだけではなく、相手にどのように伝えたらわかりやすいかなど、普段の生活にも役に立つことがありました。初めてのことだったので、何もかもがわからないことだらけでした。まだ、今もわからないことはたくさんありますが、一つ一つ焦らずゆっくりやっていきたいです。私は将来看護師になりたいと思っているため、この経験がきっと生きてくると思います。聞き書きプログラムで学んだことを忘れず、これからも将来に向けて学んでいきたいと思いました。これからもこのような貴重な機会を大事にしていき、積極的に参加してきたいです。（宮中七海）

山口文夫さんから実体験をもとにしたお話を聞いて、より深くハンセン病やハンセン病の療養所に対して理解を深めることができました。また、ハンセン病回復者の方から実際に話を聞くことで、学校や書籍での学習よりも深く学ぶことができました。私が山口さんの話で印象に残った言葉は、山口さんが出会った、いつもニコニコしている両足義足で手首から先がないお爺さんの「私には笑うことしかありません、笑ってさえいれば人は必ず集まってきます。」という言葉でした。この言葉を聞いて私はどんな苦しい時でも笑顔でいれば、自然と人が集まってくる。笑顔は人を惹きつける効果があるんだなと思いました。不機嫌な顔をするのではなく、笑顔で周囲に優しく接していけば、身近なところから差別や偏見をなくしていくことができるかもしれません。今回、山口文夫さんへの聞き書きを行って、ハンセン病の療養所の普段の暮らしや、季節の行事など、実際に聞いてみなければわからないようなことを多く知ることができました。自分たちが教えていただいたことを、今後、学校などでも伝えていきたいです。（矢田倖大）

profile

### 山口 文夫

**1949年1月8日・73歳**
**星塚敬愛園入所者自治会会長**

**［略歴］** 小学校５年生の時にハンセン病の診断を受け、小学校６年生で星塚敬愛園に入園。岡山県立邑久（おく）高等学校新良田（にいらだ）教室を卒業後、星塚敬愛園で１年ほど療養し、その後、実家の家業を手伝う。しかし、ハンセン病の悪化により、1979年に再入園。1981年に自治会役員に初当選し、2006年には自治会代表を務める。2021年より自治会副会長として会長である友人を手伝っていたが、友人が逝去したため会長職を引き継ぐ。2023年２月１日より正式に自治会会長に就任。

# 苦労ばかりと思わないで！

語り手　城　正　多磨全生園入所者

聞き手　宮崎県立延岡高等学校1年　伊藤 愛珠

## ■大学病院で言われた衝撃の言葉

はじめまして私の名前は城正です。昭和12年生まれで今年86歳になります。沖縄で生まれましたが、国家公務員だった父親の仕事の都合で長崎へ引っ越し、長崎で育ちました。私がハンセン病を発症したのは、昭和30年、18歳のときでした。「明日から学校へ行くな。」と検査に行った大学病院で言われ「明日から学校へ行くな」という病気があるのかと疑問に思いました。私自身ハンセン病という病気があること、自分がハンセン病を発症したことを知らなかったのです。

## ■偽名と宗教から始まった療養所生活

私はハンセン病を発症して、すぐに長崎県の職員に連れられて熊本県にある国立療養所菊池恵楓園へ行きました。療養所には、強制的に入れられている感じはなかったし、自宅を消毒されたわけでもなかったので、差別を受けているとは感じませんでした。療養所に入って「家族のために使っている人が多い」という理由で、偽名を考えさせられ「今から収容所に入れられるな」と感じました。療養所の職員に「何という偽名がいいですか。」と聞くと「大木三郎―（おおきさぶろう）―」とつけられ印鑑も渡されました。私の人生は、この偽名によって大きく左右されました。また、偽名を考えるのと同じタイミングで私が信仰している宗教を聞かれました。「なぜ宗教を聞くのですか。」と尋ねると、「葬式のときは宗教があったほうがいい。」と言われ、「俺、死ぬためにここに来たわけではないのに」と思いました。長崎に住んでいたので子どものときに教会に行っていたという経験からキリスト教を信仰することになりまし

た。私の療養所での生活は、偽名と宗教からスタートしました。

## ■楽しいことも辛いことも

療養所では、12畳半の部屋で同じ年齢の熊本出身の男性と二人で生活をしていました。二人で生活するには部屋は広く、想像していたよりいいところだなと思いました。菊池恵楓園の最初の印象は「野球のグラウンドがとてもいいな。こんないいところで患者さんは野球をやるんだ」というものでした。あとから聞いてみると、菊池恵楓園のグラウンドでプロ野球の2軍のチームが練習をやっていたそうです。菊池恵楓園で暮らしていた人たちはみんな野球が好きで、療養所では野球の県対抗戦もあり私も選手として出場しました。私はスポーツの中では野球しかやった経験がなく、療養所に入った時に同じ長崎出身の先輩に「長崎から野球の上手なやつが来たぞ」と言われました。このようなことから菊池恵楓園では可愛がられた思い出が一番多いです。なので、死ぬ前にもう一回くらい菊池恵楓園に行きたいなという思いがあります。療養所では患者作業をしました。作業をするとお金がもらえたので嬉しかったです。もらったお金は、食べることと衣服のために使いました。「また明日も来てくれよな」「ありがとう」患者作業のときにはこのような言葉をたくさん言われました。患者作業のときに言われた「ありがとう」は、私でも「ありがとう」と言ってもらえるんだなと思いとても嬉しかったです。「ありがとう」はとてもいい言葉だなと思いました。今でも「ありがとう」は一番好きで大切にしている言葉です。「ありがとう」と言われるのがとても嬉しかったので、作業をすることは辛いと感じず、むしろ嬉しかったです。私にとって患者作業はとてもいいことでした。私は昭和31年、19歳のときに岡山県の長島愛生園にある邑久高等学校に2期生として入学しました。邑久高等学校は、定時制の高校で、4年間学校に通いました。私は長崎にいた頃に2年間高校へ通っていたので、計6年間学校へ通っていたことになります。高校へは熊本で同室だった人が「行く」と言ったので私も行くことにしましたが、あまり勉強ができなかったので、大学へ行くことは考えていませんでした。高校時代の一番の思い出は、私は野球が好きだったので、明治大学の野球部の人に1日野球を教わったことです。その選手たちは、私達がハンセン病患者であるという差別はなく、抱くような感じで野球を教えてくれました。この経験は今でも忘れられません。私にとって学校は楽しい場所でした。私は高校も「大木三郎」という偽名で通っていたので、卒業証書も偽名でもらいました。すると高校卒業後社会復帰した時に卒業証書が役に立たず苦労をしました。長島愛生園は海に囲まれていたので、海で色々な魚や貝を採ったり、農園で野菜などを育てたりしました。それは自分で食べたり友人と夜食で食べたりしました。療養所で生活をしていたときは、差別を受けたこともあります。特に菊池恵楓園で生活していた時に言われた言葉が今でも忘れられません。熊本の人にはハンセン病ということが分かっただけで、態度を変えられたりしました。療養所近くのお店にパンを買って帰る時に「お前どこから来たんだ」と聞かれたので、「あそこから来た」と答えました。すると、「あそこって恵楓園か、お前入園者か」と言われ、「そうです」と言うと、「きゃーくされが来てもらったら困るな」と言われました。「くされ」と言う言葉はハンセン病を表していて、「きゃーくされ」は「くされ」よりもひどい言葉です。なので私は「きゃーくされで悪かったな。買ったパンは全部返す。だから払った金は返してくれ。店はまだいくらでもあるから、他の店で買ってくる」と言ってパンをすべて返しました。こういうときにはハンセン病の差別の辛さを感じたけれど、「しょうがないかな」と思うこともありました。

## ■嬉しさと緊張の社会復帰

昭和47年、35歳の時に社会復帰しました。社会復帰するときには住む場所を考えましたが、療養所で先輩だった回復者の方がいた愛知県名古屋市で働くことになりました。療養所の外に出るということで、嬉しさもありつつ緊張もしていました。仕事を見つけるのが大変かなと思っていましたが、意外にも早く見つかり、ストーブの部品を作る会社で働きました。社会復帰をした時に、回復者同士の会を作りましたが、私が再入所してからは繋がりは殆どありません。逃亡者のような生活をしていて、会社の人と遊びに行くようなことはありませんでした。会社の人とは「おはようございます」や「失礼します」といったことしか話をせず、自分がハンセン病回復者であることは隠して生活をしていました。しかし野球だけは会社の人と一緒にやったこともあります。「お前野球上手いな」と言われたり、野球ができたことはだいぶ得をしました。風邪を引いたときも病院にはあまり行かず、お酒もあまり飲みませんでした。風邪を引いた時に飲む薬は、療養所で暮らしていたからか、こういう時にはこういう薬が良いとわかっていたのも病院に行かずにすんだ理由です。またお酒は今でも全く飲みません。

## ■人生の本当の楽しさ

私は同じハンセン病回復者の方と結婚をしました。その人は、私が東北新生園にいた頃に勉強を教えていた人で、社会復帰し、行く所がなかったから私のところへ来ていたのではないかなと思います。息子が誕生したときが、人生で一番嬉しかったです。妻は看護師として働いていて、私も仕事をしていたので、仕事をしながら育てるのは大変でしたが、子供を育てるのは楽しかったです。赤ちゃんの頃から保育園へ通わせていたので、息子に寂しい思いをさせたかなと思っています。二人で育てていたので、経済的な苦労はありませんでした。しかし、息子が小学校6年生ぐらいの時に妻がガンで亡くなり、そこからは父子家庭となりました。どうやって育てようかなと苦労もしたけど、楽しいこともたくさんありました。療養所の中で子供を育てずに生活をしている人は、人生の本当の楽しさを半分捨てているようなものだと私は考えています。療養所の中では子どもを育てられない、どうしても子どもを育てたい人は療養所の外に出ないといけないという生活を経験していた私は、「子どもを育てるのはこんなに楽しいことなんだ」と思いました。息子は私が何も言わなくても自分で率先して動くようになりました。

## ■私がハンセン病というだけで・・・

息子が結婚をするとき、相手のご両親に私がハンセン病回復者であることから結婚を大反対されましたが、療養所の人から同じような話をたくさん聞いていたので、「当たり前だな」や「やっぱりこの結婚はだめかな」と思いました。しかし息子のお嫁さんが「病気なんて関係ない、私はこの人と結婚をする」と言ったのでお嫁さんのご家族に私が直接話をしに行きました。結婚に反対されたとき、相手のご両親がハンセン病についてあまり知らないなと感じ、ハンセン病について話をしました。するとハンセン病について理解していただき、結婚の了承をもらいました。お嫁さんのご家族は私に対して結婚を反対したことについて謝りましたが、もし立場が逆だったら私も反対していたと思います。結婚の了承はもらえましたが、「ハンセン病回復者であることは隠す」ということと、「お嫁さん側の親戚とは付き合わない」という条件がありました。しかし私はもともとハンセン病の「ハ」の字も言うつもりはなかったし、私自身が自分の家族や親戚との付き合いがなかったので、親戚付き合いをダメ

と言われても納得をしました。このことを息子とお嫁さんが今でも気にしているかというとそうでもないそうです。今では息子は医者として働いており、孫も二人生まれました。孫にはまだ私がハンセン病回復者であると伝えてはいません。伝えるタイミングは息子に任せようと考えています。

私は他の回復者と比べると贅沢をしたと思っています。子供を育てるのは他の回復者とは違うことだし、ハンセン病になったからこそ他の回復者と違う生活ができたと思っているからです。だからこそ私の人生はいい人生だったし、もう一度ハンセン病になってもいいと感じています。

## ■差別を無くすためには・・・

私はハンセン病問題だけではなくすべての差別を改善するには教育が大切だと考えています。何も知らないということは一番いけないし、知らないからこそ色々な差別が起こっていると思っているので、知るということは一番大切で、勉強して知ることが一番良いことだと思います。だからこそ勉強してくれる人がいるということが一番嬉しいことです。しかし一気に勉強するよりはじわじわ勉強するほうがいいと思っていて、子どもがハンセン病のことについて知れば、親やその上の世代とは違った考えになるだろうと思っているし、そういう期待をしています。

［取材日：２０２２年11月25日／12月16日
追加取材日：２０２３年２月６日］

## 【聞き書きを終えての感想】

取材をする前は、ハンセン病という病気がどのような病気かあまり知らなかったし、ハンセン病は教科書の中の世界と思っていて、今の時代を生きる私には関係ないと思っていました。しかし取材をしてみると、ハンセン病という病気を知ったふり、勉強したふりをしている私がいたなと思いました。ハンセン病の差別は今も残っていて、私達が見て見ぬ振りをしているだけだなと感じました。また事実を知らないからこそ差別をしていて、知らないことは差別を助長していると思います。つまり、差別はされる側ではなく、する側の問題なんだと思います。これはすべての差別に共通して言えることだと思いますが、例えばその人がトランスジェンダーだからとか、その人が障がい者だからとか、その人が外国人だからなどという、その人の人間性を見ること無く差別する側が差別を行っているのではないでしょうか。城さんの立場で考えてみると、息子さんが結婚される時に、親がハンセン病回復者だということだけで、息子さんの人間性を見られること無く反対されたりしていることが言えると思います。だからこそ、ハンセン病問題について、この経験を通して詳しくなれた私がハンセン病問題を次の世代に伝え、繋げることが大切だと考えました。差別を無くすためには、ハンセン病というものにスポットを当て、一人一人が自分のできることから少しずつ行動していくことが大切だと感じました。このことを伝えられるのは私自身です。だからこそこれからは私が伝えていきたいです。（伊藤愛珠）

profile

**城 正**

**1937 年・85 歳**
**多磨全生園入所者**

**［略歴］** 1937 年沖縄県で生まれた。1955 年ハンセン病が判明し、熊本県にある国立療養所菊池恵楓園に強制収容される。1956 年長島愛生園にある岡山県立邑久（おく）高等学校新良田（にいらだ）教室に入学。
国立療養所菊池恵楓園、国立療養所長島愛生園、国立療養所東北新生園、多磨全生園の 4 つの療養所を経験した。

# 思いよ届け

語り手 **黄 光男** ハンセン病家族訴訟原告団副団長

聞き手 恵泉女学園高等学校
3年 **佐藤 幸**
1年 **相原 ことは**
**五十嵐 愛**
**橘 有咲**
**中村 公美**

## ■プロフィール

黄光男と言います。１９５５年7月27日生まれで、生まれたところは大阪府の吹田市。生まれたときの家族構成は、両親、姉2人、兄1人、僕の6人家族。兄は僕が1歳くらいのときに亡くなったみたいです。上の姉は光子で、僕の10歳違い。5歳違いの姉の名前が住子。でも、名前は呼ばなかったね。大きい姉ちゃん、小さい姉ちゃんって呼んでました。

## ■3つの名前

名前のことをちゃんと言うとかなきゃあかんのですけど、僕は在日朝鮮人なのでファン・グァンナムっていうのが本名で、それを日本語読みしたのが黄光男になります。これは、育児院にいたときに使ってた名前。日本名は黄原光男です。両親たちは死ぬまでずっと「黄原」で生活してましたけど、お墓には本名を書いてるんですよ。死んでから本名になった。僕も小・中学校は黄原光男で通してて。でも高校に入るときに、本名を名乗りたいって考えたんです。在日朝鮮人であるっていうのを、なんで隠さねばあかんのやっていう気持ちが、中学2・3年くらいのときに育ってきてね。県立尼崎工業高校建築科に入ってから、本名に切り替えた。尼崎市役所に入って働くようになっても、ずっとね。

## ■ハンセン病と歩む人生のはじまり

最初は母親がハンセン病になった。大阪府に情報公開請求をした母親の患者台帳によると、ハンセン病患者と登録されたのが１９５５年の9月。僕が生まれてから2ヶ月後ですね。それで、１９５６年頃から大阪

府の職員が頻繁に我が家にやって来た。すると母親に「ハンセン病だから岡山の長島愛生園に入所しなさい」って言うわけね。１９５６年の９月までは「子どもが小さいから、今は行けない」と一貫して入所を拒否してたんですけど、10月になると入所を承諾したらしい。後から父親に聞いた話だと、９月から10月までの間に、近所のお風呂屋さんから入浴拒否されたようで。それと家を消毒されたことが、入所を承諾した理由なのかもしれません。そして１９５６年の12月６日に、母親と、その後ハンセン病にかかった下の姉さんの２人で、岡山の愛生園に入所したということです。そのとき父が「赤ん坊は育てられない」と言って、僕は岡山の育児院に預けられました。

## ■育児院にて

育児院での記憶は、小学校にあがる前くらいからあるかな。集団生活ですから大きな部屋で同じ年代の子と寝て、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちは別の部屋で寝泊まりして、食事は食堂みたいなところで一緒にしてたんですね。その施設が山の上の自然豊かなところにあって、日が暮れるまで外で遊び回ってた。両親と別れた記憶がなかったから、寂しさは一切感じてなかった。毎日が楽しくて仕方がなかった。

## ■突然の迎え

僕が９歳になる年に、母親が迎えに来る１週間前くらいに、職員の先生から「お父ちゃんとお母ちゃんが迎えに来るよ。良かったね」って言われたんですよ。それが、すごく記憶に残ってて。僕は初めて見る両親がどんな人なのか分からないでしょ。だから、気持ちとしては行きたくなかったんですよ。育児院での生活が毎日楽しいから、ずっとおりたかったんだけど、両親がわざわざ迎えに来ているのにそんなこと言えないですよね。だから、それは心の中にしまい込んだまま言えなかった。

## ■母の病気のこと

毎日母親が薬飲んでたから、何かの病気にかかってるってことがわかってね。小学４年生のときに何の病気って聞いたら、昼間の２人きりの日の当たらない暗い部屋で、誰に聞かれるわけでもないのに声を潜めて「らい病」（当時のハンセン病の呼称）と言ったんですよ。その言い方が内緒事のようだったんで、これは絶対秘密にせんとあかんもんやって思ったんですよ。「らい病」って言われたけど、僕はその病気がなんなのかわからなかったんですよ。それ何の病気って聞いてもよかったんだろうけど、病気のことをもうあんまり深く知るな、追求するなみたいな雰囲気があったから聞けなかったんです。母親がハンセン病だということはわかったけど、小学校、中学校、高校、尼崎市役所に入ってもずっと誰にも言えなかったですね。

僕の母親の顔自体はね、そんなに変形しているわけではなかったんですよ。母親はそんなに後遺症が進んでいるわけじゃなかったから、眉毛がちょっとないくらいだったかな。毎日出かける前に鉛筆みたいなもので眉毛を描くんですよ。ハンセン病っていうのは眉毛のなくなる病気なんかって、深く聞けないから自分で勝手に思ってたことがすごく記憶に残ってます。

## ■小学生の偏見

小学５年生のときにクラスに吉村君という子がおってね。ハンセン病患者は鼻が欠けたり、耳が欠けたり、そういう症状が出る人もいるから「らい病鼻ポロ」という仕草を悪ふざけでよくやっていたんですよ。ハンセン病で必ず鼻や耳が欠けるわけではないんだけど、多分誰かに教えられ

てそういう思い込みがあったんだろうね。

当時、僕は自分の母親もハンセン病やということはわかっていたので、そういうことを悪ふざけで言ってるのがものすごく記憶に残ってるんですよ。だけど、そのとき吉村君に対して何か物を言うたわけでも、反論したわけでもなかったんですよね。

## ■在日朝鮮人としての生活

親は在日朝鮮人一世ですから、朝鮮語で話したりとか、家族で朝鮮料理を食べたりということが時々あった。だから、家庭で朝鮮の話はいっぱいでてきたし、普通に朝鮮人としての雰囲気があって、自分も在日朝鮮人かなと、ポツポツと分かるようになりました。

小学校5年ぐらいのときに、クラスに在日朝鮮人の女の子がおったんですよ。朝鮮人やいうことで、すごくいじめられたみたいなんです。だから、朝鮮人やととんでもない差別を受けるっていうのと、自分が在日朝鮮人であることを絶対秘密にせなあかんと学習しました。

中学を卒業して、県立尼崎工業高校建築科に入ったんです。学校の特色で、在日朝鮮人が多かったんですよ。40人学級に8人おったんですよね。日本名を名乗ってる子もいましたけど、5人ぐらいは本名を使ってた。その在日の子らといろんな遊びをしました。

それから、朝鮮文化研究部っていう部活動に入りました。そこで、朝鮮語や朝鮮の文化・歴史を、外から来てくれた在日朝鮮人の先生に教わりました。部室には卓球台が置いてありました。それでみんなとね、卓球しましたね。卓球部ちゃうのに、顧問の先生も卓球するんですよ。それが楽しかったっていうのもあって、部活には学ぶというんか、遊びに行ってた感じですね。

高校で朝鮮文化研究部に通い、同じ在日の同胞と出会っていろんな話をできたことは、僕にとってすごく有意義だったんですね。自分が朝鮮人だということを、もう誰にも隠さんでええんやってね。自分が朝鮮人であるということの誇りを持てた、すごく幸せな時間だったのね。

## ■在日朝鮮人であることとハンセン病患者の家族であること

ところが、ハンセン病の人の家族との出会いはまるっきりなかった。孤独だったんですよね。本当は側に同じ境遇の人がいたかもしれないけど、分からないね。50歳のときに「れんげ草の会」に行くまで、患者家族と会ったことはなかった。それまでハンセン病のことは心の中で封印して、人前で話してもええんやと思えんかった。自分がハンセン病と向き合う勇気はなかったんです。自分が向き合うのも、打ち明けるのもすごく時間がかかった。朝鮮人差別よりもハンセン病差別の方が、僕はすごくしんどかった。でもね、朝鮮人差別もハンセン病差別も、どっちが重いとか軽いというもんは本来ないと思うんですね。ただ、僕の気持ちん中には、同じ境遇の人と会って話せなかったハンセン病の壁の方が高かったってこと。

## ■妻へのカミングアウト

結婚してから子供連れて週末よく実家に帰ってたんですけど、結婚3年目くらいの頃に嫁と子供だけで行った日があったんですよ。そのときに嫁と母親が話をして、母親が「生きててもしゃーない」とか「長生きしてもしゃーない」とか言ったんですよ。その後嫁が、「何であんなふうに悲観的なの、なんでなん、なんでなん」って僕に言うんですよ。そんときに母親が実はハンセン病で辛い経験をしたと説明したんですね。嫁

はびっくりしてたけど、きちんと受け止めてくれたんですよね。

自分のことを打ち明けてもちゃんと受け止めてくれる人かどうかというのは、相手の顔を見てもわからないんですよ。でも、受け止めてくれる人に対して言わないということは、この人はひょっとしたら僕を差別するかもしれんというふうに、こっちが決めつけてしまうことになりますやんか。差別する人もいるけど、しない人を信じてあげないのは違う。だから僕は、この人やったら自分のことを受け止めてくれるっていう気持ちがあるんやったら言ってもいいかなって思ってます。言った結果がどっちに転がるか分からなくても。

## ■世間への公表

「れんげ草の会」っていうハンセン病患者家族の集まりが、熊本で1泊2日の家族同士の交流会みたいなものをやってたんですね。2005年に初めてそこに行ったんですよ。僕と同じような家族の人たちと出会えて、すごく衝撃的だったんですね。それから毎年、たった1泊2日だけなんだけど、すごく楽しくて。家族のことを秘密にしとくのもおかしいな、誰にも語らないままっていうのも、なんでやろうみたいなね、そういう気持ちが湧いてきたんでしょうね。大阪に「虹の会」っていうハンセン病問題を考えるグループがあるんですけど、そこで話をしてほしいという依頼があって、50歳くらいのときに話をしたのが初めてですね。「虹の会」は小さい市民グループだから、部屋も小さくて、聞いてる人も5、6人だったかな。両親がハンセン病だと話すのは本当に初めてで、ちょっと気恥ずかしさがあったから、ギターを持っていって歌いながら話しました。

自分のことを言うのは、親の生きてきた道を探し求める作業みたいなものでした。ずっと秘密にして語らなかったから、親はどんな気持ちで生活してきたんかってことを、自分自身の中で探し求めながら話す。誰かに聞いてほしいためにしゃべってるんだけど、実は自分自身が親のことをどういうふうに思ってたのかとか考えるために、しゃべってたみたいなね。だから相手がどう聞いたかとかは、あんまり考えなかったですね。

## ■実名を出したきっかけ

家族訴訟が始まった2016年2月、提訴の前に記者会見があったんですよ。「これから熊本地方裁判所に提訴します」と訴えた。そのとき名前を出してるのは、団長の林力さんと原田信子さん。自分の名前と顔を出したのは、その2人しかいなかったんですよ。僕もそのとき一緒に並んでたんですけど、名乗ろうかどうか、ものすごく悩んだんですよ。弁護士先生にね、「黄さん、マスコミの方にお名前どうされますか」って聞かれて、ついポロっと「名前いいですよ」って言ったんですよ。林さんは家族提訴をする前に、『ハンセン病家族たちの物語』っていう本を出してそこでね、「恥でないことを恥とするとき本当の恥になる」って言ってたんですよ。意味するところは、ハンセン病っていうのは恥でも何でもなかったということです。ごく普通の病気の一つに過ぎない。だけど、それをずっと誰にも語らないで秘密にして、恥と思ってる自分がいるというわけですよね。在日朝鮮人であるとは公表してね、恥でも何でもないって思ってる自分があるにも拘らず、ハンセン病についてはずっと秘密にしたまま。そんな自分自身のことを、ズバリ言われたわけですよね。それが本当の恥でしょっていうわけなんですよ。その言葉にね、自分自身のことを問われてすごく衝撃を受けたんですよね。それに背中を押されて、ポロッと本名を名乗ったんじゃないかなあと思います。ハンセン病って何で隠さなあかんのって、悪いことをしてるわけでも何でもないのにコソコソして生きる必要ないやろみたいなね。自分の中にあったハ

ンセン病に対して感じてた恥がね、吹っ切れました。マスコミとかいろんな人たちとの繋がりもできたしね、本名を出してよかった。

## ■音楽の力

小学生のときからね、音楽に目覚めた。僕はいわゆる音楽少年でした。今は職場の尼崎市役所の仲間とバンドを組んで、演奏をしています。日常生活の中でメロディーがずっと耳の中を流れているから、音楽と僕は一体となっているんです。

初めて自分の家族がハンセン病患者だと公表したときも、気恥ずかしさを紛らわせるために僕の好きなギターを持っていきました。

僕は、ハンセン病に関する歌を2曲作詞作曲しました。1つは、僕の生涯について歌っている「閉じ込められた命」。この曲を作ったきっかけは2016年の家族訴訟の何年か前に、大阪であったハンセン病の講演会でバンド演奏をしたことでしたね。そのときに主催者からハンセン病にまつわる歌を作ってほしいと無理難題を言われて作ったんですよ。元々ギターは好きだったんですけど、やっぱり家族原告の人たちみんなで集まって歌を歌うことで、勇気や力が湧いてくる、皆が一つになれるような力がありましたね。「思いよ届け」は僕が作った2つ目の曲なんですけど、ハンセン病患者家族の生涯についての歌になってます。家族同士の集まりがあるときに、この曲と「ふるさと」を歌います。ハンセン病患者家族は、ハンセン病になって療養所に入った親を国に取られたわけなんです。その親が死んだ後も家族は葬儀にすら参加せずに、遺骨も取りに来ない人が多いんですよ。だから、療養所の納骨堂には、故郷に帰れないままの遺骨がたくさん眠っているんですよね。骨だけでも故郷に返してあげてよ、という思いを込めて、集まったみんなで「ふるさと」を歌っています。

**族訴訟支援、市民の集**

僕は、音楽にはすごく力があると思うんです。地方公務員、市役所の職員なんかには研修や啓発研修でハンセン病のことを聞く機会がたくさんあります。そのときに聞いている人の顔を見たら、こわばっていて緊張しているんですよ。同和研修や障がい者研修にしたって、差別問題を扱うのは非常に難しいし、肩が張ってしまうことがあります。でも、音楽を流すとその場の雰囲気が変わるんです。これは人間の元々持っている音楽の力みたいなもので、僕はたまたまギターを弾けるから、それを利用しています。

## ■偏見をなくすこと

皆さんいろんな病気がありますやんか。それを言うたら何かひどい差別にあうって、隠さなあかんって考えてるから、隠してるんやと思う。だけど、本来なら別にそんなコソコソとね、隠す必要がないっていうふうに思わんと駄目でしょうね。

昔から長く、ハンセン病は怖い病気とかうつる病気というような偏見とか固定観念が作られて、現代にもそのまま残っている。だから、今も差別意識を周りから集めてしまうのが怖くて、当事者が実名を出したり、顔を出したりして声を上げることが難しいのかなと思います。偏見がなくなっていけば、きっと実名を出して、声を堂々と上げることができる人が増えるのかなと私は考えています。

［取材日：2022年11月23日／12月10日］

## 【聞き書きを終えての感想】

ハンセン病問題は人々の無知が生んだ差別なのだと学びました。「知らない」という一言で、私も当時の人々のように残酷になり得たことを想像すると、学ぶことの意義を改めて実感させられました。私はこれから大学に進学しますが、どのような環境にあっても自発的に知ろうとする大切さを忘れずにいようと思いました。（佐藤幸）

当事者同士の居場所となるコミュニティなどがあることは、多くの当事者がありのままで暮らすために大切だと学びました。今回学んだハンセン病問題に加え、これからも色々な社会問題に目を向けて、自分がアライ（理解者）であることをアピールしたり、学んだことを周りに発信して、誰かが少しでも生きやすい社会を作りたいと思いました。（相原ことは）

黄さんが口を閉ざす理由になったのはハンセン病回復者の家族であることだけでなく、在日朝鮮人であることもあり、差別問題が複雑に絡み合っているのだと知りました。「朝鮮人差別もハンセン病差別も、どっちが重いとか軽いというもんは本来ないと思うんですね」という言葉で、自分の中に差別があるのは当たり前という感覚があったのだとハッとさせられ、差別は絶対にあってはいけないと再確認しました。（五十嵐愛）

ハンセン病回復者の家族の方から直接お話を伺ったことで、当時のハンセン病患者の方々を取り巻く様々な社会背景や一人の人間としての姿を知ることができ、貴重な体験となりました。（橘有咲）

直接お話を聞いたことで、当時のハンセン病患者やその家族に対する周囲の人たちの偏見と、偏見に基づいて行われた差別行動や言動が与えた当事者たちへの傷の深さを、知識としてでなく、感覚として分かりました。（中村公美）

profile

**黄 光男**

**1955年7月27日・68歳**
**ハンセン病家族訴訟原告団副団長**

**［略歴］** 大阪府吹田市生まれ。家族のハンセン病発症のため1歳から9歳までの間を育児院で過ごした後、家族とともに兵庫県尼崎市で生活を始める。高校卒業後尼崎市役所の職員になり、同僚とロックバンド「ドランカーズ」を結成。2016年2月、ハンセン病家族訴訟の原告団副団長となり勝訴となる。

発行日：2023年 4 月
発　行：「第 22 回ハンセン病問題に関するシンポジウム」事務局 公益財団法人笹川保健財団